

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04160

研究課題名(和文) がん闘病記の比較社会学的研究 「語られる病い」がもたらす個人と社会の相互作用

研究課題名(英文) Comparative Sociological Study of Cancer Tobyoki: Interaction between Individuals and Society in Narratives of Illness

研究代表者

門林 道子 (KADOBAYASHI, Michiko)

日本女子大学・人間社会学部・研究員

研究者番号：70424299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：マスター・ナラティブを提示した2005年以前のがん闘病記との比較により経時的変化や闘病記をめぐる個人と社会の相互作用を明らかにする目的で患者本人の闘病記100冊の質的調査に取り組んだ。自らの死が予見可能な時代のがん闘病記は経験を語ることで他者に「賢い患者」になってほしいとの使命感や再発・転移を重ねても前向きに生きていくと発信し主体的に医療と関わる必要性を促すものが増加している。人生の集約の仕方に個性がみられ、まさに「死を創る」時代の闘病記ともいえよう。昨今のがん闘病記における「肯定的変化」や「レジリエンス」、また「闘病」の用いられ方が多義的であること、AYA世代の闘病記の特徴等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昨今、教育場面、またケアに活用するために看護学分野での闘病記を対象にした研究は増加しつつあるが、社会学ではまだまだ見当たらない。闘病記の研究は、「診断された病いの状況を生きるのがどういうことか、個人的なものが社会的な文脈の中でどのように認識されるか」に繋がることから社会学的意義がある。社会の枠組みの変容との対応や「闘病」の意味内容にまで質的な分析へと射程を広げた本研究は、臨床分野への応用も含めて社会学の採りうる方法論と実践のひとつの提示でもあり、「闘病記」を取り巻く日本の社会文化的側面を国際学会などで発表し伝えていくことの意義もあると考えている。

研究成果の概要(英文)：I conducted this qualitative survey of 100 volumes of cancer patients' tobyoki for the purpose of clarifying the chronological changes of contents and the interactions between individuals and society by comparing them with tobyoki before 2005, which I presented as the master narratives. Currently in the era of "post-open awareness", one's own death is foreseeable, and there are a lot of tobyoki in which authors try to see their medical situations as accurately as possible. They have a sense of mission to help others become "smart patients" and urge the proactive involvement. They seem to summarize their lives individually, so it is not an exaggeration to say that their tobyoki is that of the age of "creating death". I clarified "benefit finding", "resilience" and the characteristics of the AYA generation's tobyoki. I investigated the word "tobyoki". Though it is usually used as an idiom, the word often has its own meaning, so how to use "tobyoki" is extremely ambiguous.

研究分野：医療社会学

キーワード：がん闘病記 比較社会学的研究 闘病 肯定的変化 相互作用 再構築 自己成長 ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

臨床領域でのナラティブへの注目は近年益々高まっている。医学・看護学では1998年に出版されたT. グリンハル&B. ハーヴィッツによるNarrative based Medicineが注目され、それ以降、「患者中心の医療」に向けての動きが活発化した。そこで患者の理解のために、NBM (Narrative based Medicine) はEBM (Evidence based Medicine) との車の両輪であるとの考え方が広まり、患者の「物語」に注目し、患者への理解を深めケアに役立てるという視点で、「病いの語り」である体験記からの分析なども用いられるようになった。ナラティブ論については社会学が大きな貢献をしてきた。P. L. バーガーやT. ルックマンなどの社会構成主義からの系譜は見逃せない。さらに「患者によって語られた物語は、代替が効かない個別性、独自性をもっており、医療の定式化した物語に収まらない」ことを指摘したK. ハンターやA. クラインマン、など医療人類学等の流れを受けて、病む人の生活世界や病むことが個人に与える意味や影響、病む人自身の個人的経験に照準をあてた研究も推し進められてきた。

わが国においても1990年代以降、「患者中心の医療」「患者主体の医療」が指向されるようになり、「患者の声」に耳を向けることの重要性が言われ続けている。そのようななかで、個人の病気体験記である「闘病記」にも当事者に学ぶという視点から、社会的関心が向けられるようになった。闘病記については「感情的、個人的なもの」ととらえられ、社会的に意義あるものと認識されなかったため、従来どの分野においても研究の対象とはなりにくかった。

筆者は、患者・家族と医療者の相互理解を深める際に重要な役割を果たすという視点から闘病記に注目し、出版された闘病記のなかでも約半数を占めるがん闘病記の文献調査と著者へのインタビューなどの質的調査を行い、告知をめぐる変容など社会的要因に起因するがん闘病記の変遷や、闘病記を書くことの意味、現代社会における闘病記の意義などを明らかにし、「闘病」の語源をも追究した。そのがん闘病記についての総合的な研究は、2010年博士学位論文となり、2011年10月、青海社から『生きる力の源に がん闘病記の社会学』の書名で出版され、朝日、読売、毎日新聞に「新しい分野を切り開く」(2010年11月21日朝日新聞朝刊:評者保阪正康氏)と、取り上げられた。数誌を超える看護学雑誌にも「ナラティブ・アプローチの重要性、有効性を実感できるテキスト」(「看護教育」(2012年2月号、医学書院)など)と掲載された結果、三田社会学会、日本死の臨床研究会、日本医学哲学倫理学会、日本看護診断学会での学会招聘講演、シンポジストの機会を与えられた。さらに看護大学をはじめ、いくつかの医療系大学、病院、患者会等で講演等をも数多く行ってきた。筆者が研究のなかで、最後まで追究し続けたのは「闘病記を書くことの意味」であった。そして、調査の結果、「書く」という行為は不条理な病いを否定的にのみとらえるのではなく、病気と共存していくための意味づけを可能にし、受動的な局面の多いがん闘病を能動的なものへと変化させることで、自己の再構築ができ、自己肯定感をもたらす効果をもつことを明らかにした。現代の闘病記は、病む人を病気の犠牲者やケアの受け手とする見方から能動的な行為者へと転換する移行を可能にしている。患者はケアされると同時にケアする立場にもなっている。能動的な人々による闘病記は社会へと発信されることで自己の再構成とともに社会の再構成を行うことになる。そこに闘病記の現代社会における大きな意義があると結論づけた。

その後、医学・看護学・心理学の臨床研究者に研究分担者を依頼し、「書く」ことのケアとしての臨床応用の有効性を検証する研究を科研基盤C(2013年度~2017年度)を受けて実施した。筆記療法についての文献の精査、クリエイティブ・ライティングとしてがん患者へのサポートとして取り入れられている欧州での実態調査を行った後、実践プログラムを検討し、所属機関と研究実施施設での倫理審査委員会承認を得て「書く」ことのセッションを月に1度(2014年10月~2015年3月)同意を得た乳がん・婦人科がん体験者に行なった。終了後に個別インタビューを行い、「書く」ことは自己洞察を促し、自己肯定感を伴う自己再構築の機会となっていた。さらに、書いたことをグループで話し合うことによって、体験を共有し共感でき、親密性の構築につながり、このような場や仲間が存在がまた、がん体験者にとって前向きに生きるための一助となることが明らかになった。日本ではこのような研究は見当たらず、それらの成果を論文にまとめ、日本保健医療社会学会論集に発表した(2017年)他、ISA(世界社会学会:2016年7月)やEAPC(ヨーロッパ緩和ケア学会:2015年5月)、EAFONS(東アジア看護研究者フォーラム:2014年、2015年3月)日本死の臨床研究会(2016年10月)等で発表した。

2. 研究の目的

闘病記とは病いの物語であり、個人的、独自の経験と社会や文化のなかに埋め込まれた要因とが織りあわされて構成される物語である。これまでのがん闘病記550冊を対象にした研究で、がん闘病記にみる患者の意識や「告知」との関係、がん観の時系列変化を考察し、それぞれの時代を象徴するマスター・ナラティブを作成した。さらに病期や病態別に9つのパターンに分けたうえでがん闘病記にみられる語りの内容を「回復」「衝撃」「混沌」「探求」「達観」の5つの語りに類型化し、それらの語りがどのような状況で、いかに語られるかを考察した。闘病記がもっとも多く書かれるのは初期治療後と終末期であり、2000年前後からは告知の一般化や罹患・寛解者数の増加、がんについての理解が進んだことで、自らの状況を冷静に捉えたうえで、死をも視界

に入れて自己をみつめる「探求」の語りや、終末期にあっても死を覚悟した上で生きる「達観」の語りの増加を明らかにした。しかし、筆者がその語りの分析で考察の対象としたのは、1995年から2005年に書かれたがん闘病記100冊である。現在、2人に1人が罹患し、しかも慢性の様相が強くなった現代のがん闘病記の内容は、むしろ再発がん、多重がんとうまく向き合うかが問われるような時代になっている。2006年以降に出版された闘病記の内容を分析することで、語りの内容や患者の意識について比較検討したい。さらには、がん闘病記のなかでもっとも多い乳がんの闘病記の特徴、闘病記を書く動機などについてもすでに考察、学会発表してきたが、他の部位についても同様の軌跡を描けるのかどうか、また年齢やジェンダー、職業などでたとえばがん観や語りの内容に違いがみられるのか検討したいと考えた。

闘病記には必ずしも「病いと闘う」という意識が共有されていないのになぜ『闘病』記なのか、という問題意識をもち調べた結果、「闘病」は、小酒井不木によって「病と闘ふ」積極的な意味で用いられ、小酒井の著書『闘病術』(1926、春陽堂)とその本の反響を記し翌年に出版した『闘病問答』により膾炙した「社会的造語」と考えられた。「闘病」の普及の背景には「闘病」が「総力戦」に勝つため結核の撲滅をめざした国策と一致しマスコミを通じて一般化したことを明らかにし、「闘病記」については『闘病術』後に結核の「征服記」に初めて用いられ、「病気体験記」や「闘病手記」が「闘病記」と一元化されていったことを論証した。しかし、現在の「闘病記」には敢えて「闘病」とは言わないと言及するものも少なくない。「闘病記」の記述が社会を変え、変化する社会が闘病記の内容をもまた変えてきた。個人と社会の間で闘病記をめぐる双方向的な相互作用が行われている。闘病記は自己の再構築という個人レベルを超えて「病む」ことや「病む人」への見方も変化させるといふ社会の再構築も行っているが、『闘病』記という名称は「共生」が主流になった現代の病いと向き合い方の多様性を表すのに十分とは言えないのではないかと。闘病記に「闘病」がどのように用いられているかを調査し、必要であれば新しい概念の提示も考察予定に加えた。

昨今、教育場面、またケアに活用するために看護学分野での闘病記を対象にした研究は増加しつつあるが、社会学ではまだまだ見当たらない。闘病記の研究は、「診断された病いの状況を生きるのがどういふことか、個人的なものが社会的な文脈の中でどのように認識されるか」に繋がることから社会学の意義がある。社会の枠組みの変容との対応や「闘病」の意味内容にまで質的な分析へと射程を広げた本研究は、臨床分野への応用も含めて社会学の採りうる方法論と実践のひとつの提示でもあり、「闘病記」を取り巻く日本の社会文化的側面を国際学会などで発表し伝えていくことの意義もあると考えた。

3. 研究の方法

がん闘病記の比較社会学的研究を目的とし、国内で2006年以降に出版された患者本人によるがん闘病記100冊の文献調査を行い、闘病記の書き手や書かれた内容について分析し経時的変化を捉えた。質的調査(ドキュメント分析)が中心となった。書かれた記述と著者の語りを重ね合わせ考察するために、さらにはジェンダー、年齢、職業等で類似と差違を文献研究で明らかにしたうえで、必要に応じてインタビューも行う予定であったが、2020年から続いたコロナ禍のために残念ながらその段階までには至らなかった。

まずは、2006年以降に(2010年代後半までに)出版された患者本人によって書かれたがん闘病記を収集するところから始めた。前回、闘病記にみられる語りのタイプを明らかにした研究と同じように書店やアマゾンを通じて入手可能な100冊を分析対象に選び、書名、著者名、出版年、出版の型、原発部位、発病年齢、病態類型、執筆病期、出版時の状況、職業、宗教など属性や基本的事項についてエクセル表に入力しリストをつくり全体像を把握するところから始めた。100冊のがん闘病記について、精読しながら分析に必要なカテゴリーを気が付いた段階で増やしていった。具体的には、「ベネフィット・ファインディング」や「レジリエンス」、「死生観」、「闘病」の用い方や「書くことの意味」、「出版の意味」、「医療者のことば(言われて嬉しかったこと・傷ついたこと)」などである。対象としたがん闘病記100冊の内訳は次のようであった。

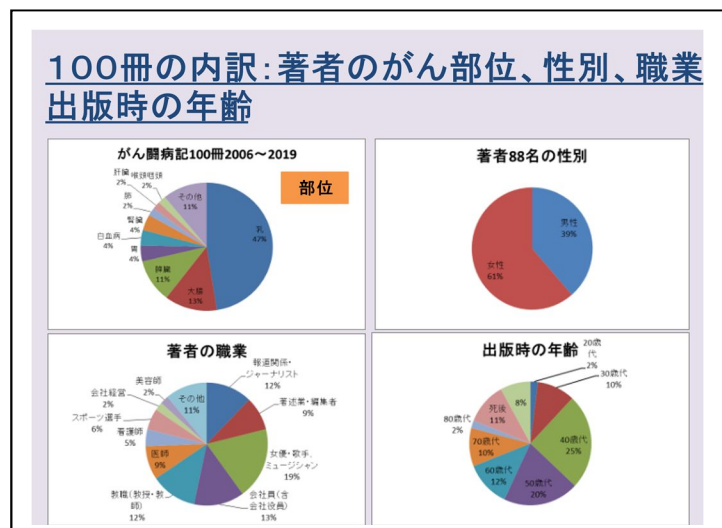


図1 100冊のがん闘病記の内訳

2冊以上出版しているケースがあり、著者88名のうち男女の別では女性が61%、男性が39%であった。部位については、前回2005年までの調査で、乳がんが最も多かったが今回も変わらなかった。また書き手の年齢は40歳代50歳代で約半数を占めたがその傾向も前回と比較して変わりがなく、著者の職業は、ジャーナリスト、著述業で21%を占め、女優や歌手ミュージシャンなど著名人が19%、教職12%、医師看護師等医療職が14%を占めた。膵臓がんの闘病記、20歳代30歳代のAYA世代の闘病記も増加していることがわかった。

4. 研究成果

(1) 「がん闘病記にみる内容の変化、死の変容」

今回、2006年以降に出版されたがん闘病記100冊を用いてまず明らかにしたのは、著者にみられる「死」の捉え方がどのようなものであるか、どのように変容したのか、その要因は何かについての考察である。がん全体の5年相対生存率が66.1%（2009年-10年にがんと診断された患者）を超え（前立腺がんや乳がんにおいては90%を超える）、がんは死に直結する病いというよりもむしろ長期間にわたって治療を行い、共存していく慢性疾患である。

さらには2人に1人が生涯においてなんらかのがんに罹患するという、がんが特別の病いではなくなった現在、終末期においても「告知」が一般化し、自らの死が予見可能になった「ポストオープン認識」（田代，2015）時代のがん闘病記は、死にゆく過程、死をも自ら創出する時代の闘病記といえる。事態をできるだけ正確にありのままにとらえて正面から主体的、能動的に向き合おうとするものが増加している。「すべて」を知ることで、目標が明確になり、「闘病」意識が高まる一方で、治療が不可能となった場合も自分の人生の集約の仕方に個性がみられ、自らの価値観を大切に「残された時間をどう生きるか」を考え、実行しようとしている。

とりわけ、2010年代以降昨今の闘病記から読み取れることは、闘病記に「4a」「ステージ」など詳細な病期と余命、相対生存率等が記されることである。現在の情報化社会において、スマホやパソコンで病気についての情報は簡単に調べることができ、自分のがんについてもさまざまな情報を得ることになる。また闘病ブログ等を通して、同病体験者のがんと向き合い方、治療法、生き方死に方等を容易に知ることができ、参考となる。著者は、早期発見に至らなかった自らの経験を含め、語ることで、他者に「賢い患者」になるよう役立ててほしい、参考になれば、との使命感や再発・転移を重ねても前向きに生きているとのメッセージを発信することで、病気で落ち込む人を救いたい、また自身が納得できるように患者が主体的に医療と関わる必要性を促すものが増加している。ベネフィットファインディング（肯定的変化）に触れている場合も少なくなく、形態としてはブログから書籍となったものも増加している。以前には少なかった膵臓がんの闘病記やAYA世代の闘病記の増加もみられる。

成果を日本臨床死生学会や日本死の臨床研究会、ISA（世界社会学会）等で発表した。

(2) がん闘病記にみる肯定的変化(Benefit Finding)

事態をできるだけ正確にありのままにとらえて正面から主体的、能動的に向き合おうとするものが増加した昨今の闘病記に見出せるのは「がんは決してマイナスばかりではない」と多くの著者が「肯定的変化」に触れていることである。対象にしたがん闘病記100冊を用いて肯定的変化を抽出したところ、「肯定的変化」について 周囲への感謝 日常の喜び 日々を大切に生きることの自覚 自己存在の意味確認と他者への使命 人生観・死生観の変化 自己成長 がんそのものへの感謝、と7つのカテゴリーに分類ができた。

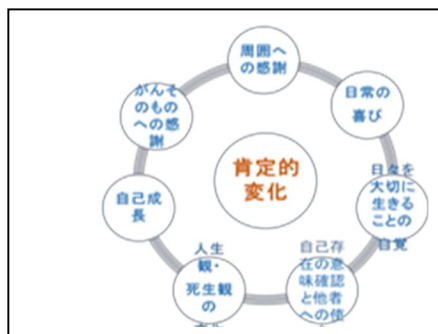


図2 肯定的変化

医師をはじめ、看護師等医療者によって書かれた闘病記が16冊存在したことから、特に医療者の肯定的変化についても調べてみたところ、「病気になって初めて患者さんの気持ちがわかったような気がする」、「患者さんの立場により近づけたようにも思う」、「それまでは表面上だけで『大変でしたね』と言っていたこともあったが、復帰してからは患者さんの気持ちをできるだけ深いところまで理解したい、共感したいという気持ちが強くなった」、「自分がパニックになってみて、こんなにも辛いものだと感じた。今までの看護師としての自分の対応を反省した」、「少しでも苦痛をとってあげられるかを以前にもまして考えるようになった」という自己成長が多くみられた。

成果を日本緩和医療学会、ISA（世界社会学会）で発表し、医療者の肯定的変化についてはAPHC（アジア太平洋ホスピスカンファレンス）で発表した。

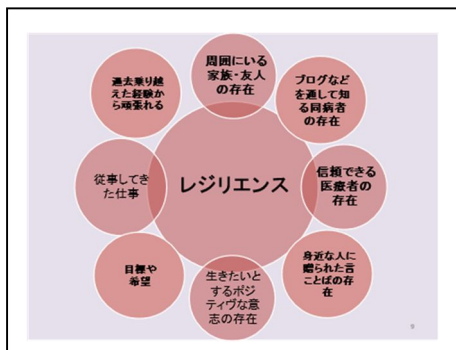


図3 レジリエンス

(3) がん闘病記にみるレジリエンス

東日本大震災以来、注目されるようになった概念に「レジリエンス」がある。レジリエンスとは弾力性、復元力、回復力を意味し、「厳しい状況にあっても、人間がもつ内的な力によってその状況を跳ね返して適応し、立ち直れる力であり、その過程」ととらえられていて、物理学からきたことばである。昨今のがん闘病記にこのレジリエンスがどのように現れているのか100冊の闘病記についてドキュメント分析を行ったところ、次の8つが見出された。

がん患者を支えるレジリエンスとして、本文の内容から浮かび上がったものには 家族や友人など周囲にいてくれる人の存在、 ブログや闘病記を通しての同病者の

存在、信頼できる医療者の存在、身近な人から贈られたことばの存在、生きたいとするポジティブな意志の存在、目標や希望、従事してきた仕事、過去に乗り越えてきた経験等が挙げられることがわかり、日本緩和医療学会で2023年6月、発表が決定している。

(4) AYA世代のがん闘病記

昨今、AYA世代の闘病記が少なくない。AYA世代とは、15歳から39歳の患者があてはまるが、その年代での罹患者の闘病記は30冊、がん闘病記の著者は40歳代50歳代で約半数を占めるが、死後に出版されたものを含めて20歳代30歳代で書かれたものは13冊あった。ほかの年代に比べAYA世代の闘病記に顕著にみられる特徴を導き出すとともにケアのあり方も探ろうと考えた。

AYA世代の闘病記には乳がんが多いが、横紋筋肉腫や中皮腫、腎がん、胃がん、肺がん、大腸がんとさまざまである。20歳代の患者は、罹患時には育ててくれた親に「申し訳ない」という気持ちを抱いていたりする。現在医療機関や行政での重点的なケアも行われているように、就業、就職、恋愛、結婚、そして妊孕性の問題とさまざまな問題を抱えていることがわかる。しかし、多くの闘病記から前向きに「今を生きよう」「納得いく人生を」などとの力強さも感じられる。さらにこの世代の人たちは、自らががんが実解した後に、社会のために役立てたい、自分の経験を同病で苦しむ人のために役立てたい、そのために自分が何かできたらと、患者支援の組織を結成するなどに至っている場合もみられる。

AYA世代の闘病記には、(年齢的にも)まさかのがんを宣告されたときの衝撃から、闘病、あるいはがんと共生していくさまが詳細に描かれているが、前向きな一歩につながる契機として医師の一言に支えらえるケースが少なくない。子どもをもつことについて、仕事を続けることについて、「医療者の言葉が嬉しかった」、「勇気づけられた」という記述も多くみられ、主治医をはじめとする医療者の言葉は、「生きる力」に直結するものとなっていることが伝わってくる。日本緩和医療学会で発表した。

(5) がん闘病記にみる「闘病」の多義性

「闘病」を「病いと闘う」意味と捉えるなら、がん闘病記のなかには必ずしも「闘病」意識が共有されていないことをこれまでの研究で明らかにしてきた。とりわけ2000年代前後からは、著者ががんと「共生・共存」を用いて「がんと闘う意識はない」と明記するものも増加し、「なぜ『闘病』記なのか」というのか、調査したところ、『『闘病』記』の「闘病」は社会的造語であり、管見した限りでは1920年代半ばに、医学者であり、探偵小説家、そして十年来の結核患者でもあった小酒井不木の「病と闘う」意味で用いた『『闘病』術』に始まることにもすでに触れてきた。「共生・共存」が増加した2000年代初期には『『闘病』記』という名称は実際の内容にそぐわないのではないかと考えたが、経時的变化を追究するために行っている本研究において昨今の闘病記には、依然として「闘病」が多く用いられていることがわかった。そこで「闘病」がどのように認識され用いられているのか100冊の闘病記を調べてみた結果、現在のがん闘病記にみられる「闘病」の用いられ方には5種類見出された。

通常用いられていることばとして、特に意識せず「闘病中」「闘病生活」「闘病期間」などと使われている場合ももっとも多い。また、「病気との闘い」「闘病」の記録のように「病いと闘う」意識が明確に表示されている場合、「闘病」を「自分との闘い」などと自分なりの解釈やこだわりをもった用い方、そして「闘病」とはいわないとあえて書く否定的な用いられ方、まったく「闘病」が出てこない場合である。とりわけ、「共生」「共存」が多用され始めた2000年代前後には「闘病」が用いられないものが多く、昨今はまた用いられている。乳がん闘病記には「闘病」の出現が比較的少ないことがわかった。がん闘病記に用いられる「闘病」は慣用語として特に意識せずに用いられている場合ももっとも多いが、意識して用いている場合は、がんの治癒率上昇や情報社会でさまざまな情報を得て「闘病」意識を明確にしている。「闘病」を自分なりに意味づけたり否定的に用いている場合もみられ、闘病記にみる「闘病」の用いられ方はきわめて多義的であることを明らかにした。この成果については日本死の臨床研究会で発表した。

(6) その他

今回の研究を始めた2017年、最初に成果を発表したのは、前回の研究に基づくがん体験者へのクリエイティブ・ライティング・プログラムの開発であった。「書く」ことの意味を追究しその意義を論証した後、「書く」ことが「補完ケア」として可能なのではないかと考え、臨床経験のある多領域の研究者とともにがん体験者に臨床応用としてプログラムを開発し検証を行った。アンケートによる記述統計や参加者へのインタビュー結果から、今後、実践を続けるためにプログラムの内容を再検討するものであった。またグレイザー&ストラウスのアウェアネス理論における4つの認識文脈が日本におけるがん闘病記においても考察可能であることを明らかにし、加えて「ポストオープン認識」時代、現在のがん闘病記の特徴をまとめISAでこの6月末に発表することになっている。上記研究の成果は、国内外の学会で発表した他、闘病記に関しての連載を担当した季刊誌『薬学図書館』に論文掲載した。今回書籍化される予定で現在加筆修正等に取り組んでいる。闘病記研究からスタートしたハンセン病療養所における元患者や看護師のライフストーリー研究は『保健医療社会学論集』(2020)(日本保健医療社会学会)に掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 門林道子	4. 巻 32巻1号
2. 論文標題 「島に育てられた ハンセン病療養所元看護師のライフストーリー」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『保健医療社会学論集』（日本保健医療社会学会）	6. 最初と最後の頁 96-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.32.1_96	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 65巻3号
2. 論文標題 「家族が書く闘病記 悲嘆を乗り越える」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11291/jpla.65.3_98	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 65巻4号
2. 論文標題 「現代のがん闘病記と『肯定的変化』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁 148-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11291/jpla.65.4_148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 64巻2号
2. 論文標題 「闘病記がいかに書かれ出版されるのか」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11291/jpla.64.2_70	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 64巻3号
2. 論文標題 「闘病記を書くことの意味」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁 124-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11291/jpla.64.3_124	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 64巻4号
2. 論文標題 「書くことをケアに」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁 202-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11291/jpla.64.4_202	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 65巻1号
2. 論文標題 「A. フランク 3つの語りとがん闘病記」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11291/jpla.65.1_15	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 65巻2号
2. 論文標題 「続 A. フランク 3つの語りとがん闘病記」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『薬学図書館』	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11291/jpla.65.2_63	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 63巻4号
2. 論文標題 「乳がん闘病記をめぐってその 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 196-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 63巻3号
2. 論文標題 「乳がん闘病記をめぐって その 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 146-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 63巻2号
2. 論文標題 「乳がん闘病記をめぐって その 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 86-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子・城丸瑞恵・仲田みぎわ・佐藤幹代	4. 巻 第28巻1号
2. 論文標題 「『書く』ことでのケア 乳がん・婦人科がん体験者への臨床応用の試み」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『保健医療社会学論集』（日本保健医療社会学会）	6. 最初と最後の頁 44-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.28.1_44	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 第50巻3号
2. 論文標題 「なぜ病いを『書き』『語る』のか 闘病記がもたらす個人と社会の相互作用」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『看護研究』（医学書院）	6. 最初と最後の頁 191-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1681201370	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 第62巻2号
2. 論文標題 「『闘病』記の誕生」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 77-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 第62巻3号
2. 論文標題 「『結核』から『がん』へ」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 138-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 第62巻4号
2. 論文標題 「がん闘病記と『認識文脈』」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 195-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門林道子	4. 巻 第63巻1号
2. 論文標題 「がん闘病記と『認識文脈』『オープン』認識の時代へ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『薬学図書館』（日本薬学図書館協議会）	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 3件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 " Awareness Contexts " Reflected in Cancer Tobyoki
3. 学会等名 XX World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記にみるレジリエンス」
3. 学会等名 第28回日本緩和医療学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「海外のホスピス・緩和ケア 医療社会学の視座から関わって」
3. 学会等名 第37回 城南緩和ケア研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「医療社会学の名著とがん闘病記 アウェアネス理論認識文脈をめぐって」
3. 学会等名 日本死の臨床研究会第46回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 門林道子（星直子・菊池麻由美・井出里美・寺山範子）
2. 発表標題 「闘病記の研究活用 闘病記の活用と可能性」
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会 企画シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「AYA世代のがん闘病記」
3. 学会等名 第27回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 Self-growth as One of Benefit Findings in Cancer Tobyoki Written by Medical Professionals
3. 学会等名 14th Asia Pacific Hospice Palliative Conference (APHC2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記にみる『闘病』の多義性」
3. 学会等名 第45回日本死の臨床研究会年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 Benefit Finding in Cancer Tobyoki
3. 学会等名 ISA Forum of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記にみる肯定的変化」
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア 合同学術大会 2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 I Was Brought Up in the Island-with Ex-patients of the Hansen's Disease Sanatorium
3. 学会等名 23rd EAFONS (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 Care in Hansen's Disease Sanatorium: Life Story Interview with a Nurse
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記にみる死の変容」
3. 学会等名 第25回臨床死生学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 Transition of Cancer Tobyoki in Japan
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology 第19回世界社会学会議(トロント, カナダ)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記の変容とその要因 闘病記の比較社会学」
3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「つなぐ・つなげる闘病記 患者が主体的に生きるためのケア」
3. 学会等名 第24回日本看護診断学会学術大会（招待講演：市民公開講座）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記に社会学的視座から関わって」
3. 学会等名 日本保健医療社会学会 看護・ケア研究部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「緩和ケアとしての『鎮静』に関わる問題提起」
3. 学会等名 城南緩和ケア研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門林道子
2. 発表標題 「がん闘病記にみる『語り』の変遷」
3. 学会等名 第41回日本死の臨床研究会年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 門林道子・佐藤幹代
2. 発表標題 「がん体験者へのクリエイティブ・ライティング・プログラムの開発」
3. 学会等名 第30回日本サイコオンコロジー学会総会第23回日本臨床死生学会総会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 門林道子 (澤野美智子編著 著者34名)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 230
3. 書名 『医療人類学を学ぶための60冊 医療を通して「当たり前」を問い直そう』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>門林道子：新聞記事掲載 「書くことでのケア」研究とその成果を紹介</p> <p>1. 2017年2月1日（水）読売新聞 夕刊 8面 「こころ 女性がん患者「書く」ケア効果 気持ちを整理 病と向き合う」</p> <p>2. 2017年2月24日（金）読売 The Japan News（英字新聞）2面 「Writing helps patients face down cancer」</p> <p>闘病記を書くことについての意味をめぐってのインタビュー掲載</p> <p>3. 2017年7月14日（金）毎日新聞 夕刊 2面 「特集ワイド 麻央さん、ありがとう」</p> <p>4. 2018年6月27日（水）朝日新聞 朝刊 大阪版 29面 「がんとともに 私も闘病 ブログで発信」</p>
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------